

第4章「仕事」

1節 イントロ

- 169p ○ リーズの市庁舎…産業革命の中心地：「正直は最良」「法と秩序」「**前進**」「**労働**はすべてに勝利する」
 「前進」は目標であり、「労働」は到達への乗り物（手段）
- ヘンリー・フォード「歴史なんてたわ言ですよ。伝統などもいらないでしょう。みんな、現在のなかで生きてがってるんだし、価値のある歴史は、いまこの瞬間につくられている歴史だけでしょう」
 （現実主義、現代主義アメリカ人）アンブロウズ・ビアーズ「(未来とは) 事業が栄え、友人が誠実になり、幸福が確実となる時代のことをいう」
- 前進は『歴史の仕事』ではなく、『現在を生きるわれわれの仕事』であり、重要なのは今作られつつある歴史つまり『未来』だけ
- こうした近代的自信⇒近代的ユートピアは必ず実現できるという信念、決意
 ・ 未来は生産物と同じに、**仕事**によって考案、企画、製作されるもの。
 ・ 現在を支配⇒未来に対する自信⇒過去を無視することが可能
 = 進歩とは歴史に意味がなくなったものと考えること。

2節 歴史の進歩と信頼

- 171p ○ 「進歩」とは歴史の質ではなく現在への自信であり、「時間はわれわれの側にある」「われわれは物事を実現できる」という二つの信念からなる。
 進歩を確信させる唯一の理由「現在をつかみきっている」という自信が、現在ゆらいでいる。その原因も明白。
- 173p ○ 第一の原因 「世界を前進させる」主体の明らかな欠如
 ← 自信の基盤となっていた堅固なヨシユア記的言説の崩壊
 特に近代国家の変化・・・政治から国民を動かし目的を実現させる力が剥奪された。
- 174p ○ 第二の原因 行為の主体にはなすべきことがわからないという状況
 あらゆる社会計画の行き詰まり（マルクス主義、経済自由主義、フランソワ・リオタールの質問）

↓

人為的社會のこれまでのヴィジョンは悪臭を放ち、これからのヴィジョンには
先天的なうさん臭さが漂う。

- それでも近代の進歩信仰は終わらない。
進歩→完成への一時的な段階ではなくて、永遠の挑戦とプロセスへ。
進歩の意味→極度に個人化。…大部分の現代人は現実の掌握があやふやで、
様々な面で不確実性に直面⇒その結果どんなに綿密に計画を練っても予想通り
の結果は期待できない傾向。

- 177p ○ 未来を征服することで、秩序と確実性を創り出そうとする近代的野心
仕事を持つ本来の利点は秩序形成、人類にみずから運命を決定させる歴史的行動への貢献
→歴史形成において仕事は人類全体が従事しなければならないもの
→結論
- ・ 仕事に従事するのが「自然の状態」であること
 - ・ 貧困の原因はその自然の状態を離れたことにあること
 - ・ 種全体の前進に対しておこなわれた貢献の度合いによって人間を評価すること
 - ・ 自己の道徳的向上と社会全体の倫理水準の向上をもたらすすべての行動の中で、仕事を最高のものと考えること
 - ・

- 178p ○ 不確実性が不変の状態となった現代
- ・ 未来への設計が短期的で、生活の全体が短いエピソードへと分割
 - ・ 世界の再迷路化：純粹理性の敗北である偶然と驚きが迷路を支配する。
 - ・ 労働は秩序の樹立と未来の掌握を諦め、偶然性に支配される目先の結果を目指すものへ。
 - ・ 仕事から倫理的価値が失われ、審美的価値によって判断されるものへ変化

3節 労働の発生と衰退

- 181p ○ 労働の発生
労働＝必要な物資を共同体に供給するために行われる肉体的努力「オックスフォード英語大辞典（1776年）より」
→その100年後、「労働者、工員の総体」「労働組合」の意味も。
「労働の三面体」的構造＝仕事の意義・階級形成・階級に根ざした政治

- 182p ○ 世界的不平等の出現
文明が最盛期に達した段階（1c のローマ・11c の中国・17c のインド）での富や収入に大差はなかった。
18c ヨーロッパの個人所得：インド、アフリカ、中国の個人所得=13:10
1870 ヨーロッパ：最貧国=11:1
1989 ヨーロッパ：最貧国=50:1
たった二百年で差は 50 倍に！
新たに出現した状況を理解するために、近代ヨーロッパに付随してきた重農主義的、商業中心思想に代わった新たな政治経済学によって新しい概念と認識上の枠組みが示された。
- 183p ○ カール・ポランニーの「大変革」の出発点：労働と生活の分離
→労働は単なる商品として扱われるように。
労働という考えが心理的にも「本来」属すべき「全体」から切り離され、自己充足的独立存在へ凝縮される。（「全体」=土地、人類の進歩）
=「労働の解放」として、受け入れられた。
「伝統的生活様式」という秩序⇒新たな秩序（堅固な近代、重い資本主義）に支配される。
（このとき）フォードが社員の給料を倍にしたのは、労働の流動性に歯止めをかけ再び繋ぎ止めるため。
- 188p ○ 堅固な近代、重厚な資本主義
資本と労働は相互依存：労働者は生活のために雇用に依存し、資本は生産と成長のため労働者に依存した。両者は同じ住所に共存し、住所変更は不可能。
両者を結びつけたのは売り買いの取引：資本家は十分な資産を、労働者は健康をもつ必要があった。⇒資本と労働の再商品化が国家の関心事。（福祉国家は失業者を確保するという意味で、自由主義、保守主義を超越したもの）
- 189p ○ 長期的精神構造
若いフォードの見習い工は、ほぼ確実に自分が同じ会社で一生を終えると思っていた。←労働の買い手と売り手は、長期間、実際には永遠に、密接に結びついて離れないという経験より出てきた期待から。
↓↓
第二次世界大戦以降、相対的安定の時代へ：争い・対立によって妥協点を見つけあい、お互いのつながりを強化した。（ex.労働者は反復作業を受け入れる代わりに、雇用者に自分たちの権利を認めさせた）

↓↓状況が一変

〔現代〕長期的精神構造から短期的精神構造へ

柔軟性が求められるようになり、短期契約、契約更新型、契約のない雇用が生まれ、働き手の生活は**不安**なものに。

4節 結婚から同居へ

- 191p ○ 現代の不安定さは深刻なレベルにある
生活や未来を台無しにする災難は、集団の団結や討議で打ち破ることができないし、災難は分断をもたらし不条理にだれかれ見境なく襲ってくる。→共通の利益という考えは漠然とした価値のないものへ。
・労働者は旧来の労働組合に運動では十分に守られず、一人で恐怖に耐えなければならぬ。
・雇用は短く不安定で、エピソード的なものへ。
マーク・グラノヴェッター「弱い絆の時代」
セネット「長期的関係より、一時的連携が有益な時代」
- 193p ○ 浮遊する資本主義
結婚生活と同居の違い：同居は一時的なものであり、双方向的合意と相互依存によってなりたっているが、同居の理由や望みが消えればいつでも関係は一方向的に解消できる。
移動の自由によって資本は労働への依存から解放された。
→資本は地方政治家を脅迫し、要求をつぎつぎ呑ませている。政府は資本の引き上げを回避するために政策を変更させられる。
(政府は低い税金、規制緩和、規則の完全撤廃によって、「自由な企業活動」にふさわしい環境を整備する。)
資本は大量の工場労働者という荷物を捨て、身軽に世界を飛び回る。安定した関係を樹立することは、機動性を失い、競争力が低下するかもしれないこと。
→動きの速度が社会の階級化と力のヒエラルキーを決定する最大の要素
- 195p ○ 利益を生み出すアイデア
大きな富を得るのに必要なのはより多くの消費者を惹きつけること。
→資本の競争力・効率、利益率は消費者に依存。労働力の存在は二次的な関心。
経済活動に従事する4類型の人間(ロバート・ライシ)
① 「象徴の操り人」：アイデアを魅力的に見せ、売りものにする方法を発明
② 労働を生む人間(教育者や福祉国家のさまざまな役人)

③ 「個別サービス産業」に従事する人たち：顧客と直接顔を合わせ、製品を売り、需要を作り出す人間。

④ 労働運動の「社会的基層」をなしてきた人たち。「ルーチン労働者」
⇒取替え可能な第4の人たちは自分たちが使い捨てであることを承知し、仕事に特別な愛着を持ったりしない。→柔軟化した労働市場に対する自然な反応
新しい軽量資本主義の頂点にいる人たちもまた、軽量で変則的。迷路を生き抜く技術に長けている。

Ex.飛行場のバーで隣り合って携帯電話を手にする二人の男性の話(お互い一言も話すことなく、携帯電話で色々な相手に連絡を取り続ける)

198p

今日の企業組織には無秩序の要素が意図的に織り込まれている。→柔らかく、流動的であればあるほどよい。

【効率と生産性向上の鍵】

- ・ 確立した知識を鵜呑みにしないこと
- ・ 前例には従わないこと
- ・ 蓄積された経験から叡智を学び取ろうとしないこと

5 節 追記—引き伸ばしの短い歴史

201p

○ 先延ばし (procrastinate)

先延ばしとは物事を到着順の自然な順序で処理しないで、物事の順序を操作しようとする能動的行為

近代において時間は目的地に向けての行進、巡礼。現在は不完全で、その先にあるより高い価値へと一歩近づくことに意味がある。

未来の巡礼者の生活は、達成点への旅であるが、達成は生活の意味の喪失でもある。

→先延ばしは時間的制約を破り無限に先送りする機能が内臓されている。

204p

○ 近代社会の基礎として、世界内存在の近代的形態を形成した行動・態度は充足の先延ばしである。

先延ばしの抱える二面性：リビドー (欲望) とタナトス (自己破壊への衝動) は先送りのたびに衝突し、先送りはリビドーに対する勝利であった。充足の望みをちらつかせ、欲望はわれわれに努力をかりたてるが、かりたてる力を持つためには充足が可能性だけに留まっていなければならない。

先延ばしは欲求充足を行動動機として否定するどころか、むしろ人生の究極の目的とした。

先延ばしの二面性から生じる正反対の傾向

- ① 仕事のための仕事を説き、先送りを永遠に続けさせようとする労働倫理
- ② 労働に手段としての価値しか与えず、禁欲と断念は最小限に抑えておきたいという消費の美学

- 206p ○ カジノ文化においては先延ばしは二方向から同時攻撃をしかけられる。「はい、これまで」と先送りにストップがかけられ、勝利したとしても、すぐ次のゲームが始められる) こうして、先送りの始めと終わりはほとんど重なり、欲望と充足の距離は恍惚の一瞬へと短縮される。
- 重要なのは、無批判な、瞬間的な自己充足である。

6 節 流体的世界における人間の絆

- 207p 二種類の人間が占有する二種類の空間
- －対話はないが連絡はある
 - －共通性はないが、共通性は装われる
 - －異なった歴史をもつ
 - －同じ傷つきやすい不安定な世界にある

- 208p ○ ピエール・ブルデューの講演
- 各国の思想家同様に述べていることは、いまの生活状況の最も普遍的な特質である、不安定（身分、権利、生活）、不確実（永続性と将来の安定）、危険性（からだ、自己と、財産と、近隣と、共同体の）。
- ・不安定さは雇用によってなりたつ生活につきものに。→問題はすべての人間が解雇の心理的影響を受けていること。
 - ・長期的安定がないから、即座の欲求充足が合理的選択になり、満足の先送りは魅力を喪失する。
 - ・人間は世界を使い捨てのものばかり集めた器と認識するように。
 - ・世界はよく言えばぼやけてかすんだ、悪く言えば危険性に満ちたもの。
- 「いま」が生活戦略のキーワードであり、機会を利用しないことは許されないし、深入りはあすへの障害となるため、かかわりが薄いほうが損害が少ない。
- こうしたわれわれの生活姿勢と労働市場を牛耳る人々の不安定化政策によって、仲間同士の絆は弱まり消滅し、親密な関係は一時的な契約に取って代わられた。連帯は消費されるものとして関係の解消のほうが望ましいとどちらか一方が判断した時に一方的に破棄される。
- ・不安定な世界の「消費化」と人間の絆の崩壊
- 消費は生産と違い孤独な行動である。

214p アラン・ペイルフィット

近代社会の本質的で顕著な特徴：自分自身・他者・組織に対する自信

近代の秩序構築の活気ある動きは、自信に制度的礎を与え、信頼を託すための安定した枠組みを提供し、価値の追求と獲得に将来の保証を与えるものであった。

信頼を育てる重要な場＝企業による雇用

ピエール・ブルデュー

信頼の崩壊と政治参加、集団行動に対する感心の低下の間の関連性

ライシの第四の範疇に居る現代人たちは現実を把握する力もなく、移動も禁じられて地域に幽閉されたままである一方、資本はグローバル化した。→現代人に勝ち目はない。

ジャック・アタリ

国家はネットワークを支配できなければ、権力を行使できない。そこで、ネットワークに支配を及ぼせなければ、政治組織は決定的に弱体化する。

○重量資本主義から軽量資本主義への移行、堅牢な近代から流体的近代への移行は労働運動の歴史を説明するためのもの。労働運動が陥った危機的状況の原因を時代のムードに帰すことは不合理で、今の生活環境や社会設定が昔の労働者が権利のために団結した時代とはまるで違っていることを前提としなければならない。